

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

5

2016

特集 企業の農業で拓く可能性



企業の農業で拓く可能性

3 栽培力と経営力のある魅力的農業ビジネス

三輪 泰史

農業法人化の最大の意義は多様な人材が参画することによる相乗効果である。もうかるビジネスにつながる法人化推進を研究者の目線で語る

7 集落営農組織法人化で描く地域ビジョン

田中 尚智

法人化した集落営農組織が独自の取り組みにより地域資源を活用し未来展望を切り開いている。法人化を図ることで生まれた新展開を紹介する

11 農業価値を創造して持続的発展を果たす

坂上 隆

農業を土台とした企業の経営で持続的発展を目指す農業法人。しっかりした経営理念と人材育成が、そのカギとなる

情報戦略レポート

15 中国人訪日旅行者、「寿司」「刺身」「お好み焼き」に大満足

— 中国人訪日旅行者実態調査 —

経営紹介

経営紹介

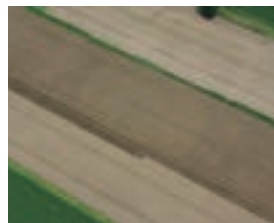
23 有限会社わたなべ牧場／島根県 渡邊 太郎

乳製品加工に進出したがコストに見合う価格を付けず、売れば売ほど赤字が膨らむ体質に陥る。安定した経営のために目指したことは何か

変革は人にあり

27 ダンフーズ株式会社／愛知県 螺澤 七郎

野菜の濃縮エキスの原料供給元の農協と長期間連携し、信頼関係を結んでいる企業の取り組みと雇用での地域貢献を紹介する



撮影：中野 耕志

北海道夕張郡
2008年初夏撮影

初夏の石狩平野

■ 石狩平野の広大な農耕地を上空から見る。明治初期頃までは農耕不適の泥炭地で原野だったこの土地を豊かな農地に変えた先人たちの想を■

シリーズ・その他

観天望気

水田利用方式の可能性 佐藤 了 2

農と食の邂逅

農業生産法人有限会社

STRAWBERRY FARM 陽一郎園／群馬県

大畠 佳美／香織

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

ごはんだよー 西村 淳 22

主張・多論百出

Food Watch Japan 編集長

齋藤 訓之 25

耳よりな話 170

トランス脂肪酸問題の行方 都築 和香子 30

まちづくりむらづくり

何とかすっぺ、と民宿を立ち上げて
農家のお母さんが集落活性化に成功

飯豊町商工観光課観光交流室／山形県

伊藤 満世子 31

書 評

安富 六郎 著『武蔵野・江戸を潤した多摩川』

宇根 豊 34

インフォメーション

第11回「アグリフードEXPO東京2016」を開催します
情報企画部 35

福井市内で融資先交流会を開催 福井支店 36

京都の食に関するインバウンドセミナーを開催 京都支店 36

交差点 アジアの農業金融関係者が静岡県の先進農業を視察
静岡支店・情報企画部 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第11回アグリフードEXPO東京2016 38

望天 観天

水田利用方式の可能性

日本の水田農業ビジネスは、高定住社会というコミュニティと農地・農道・水路など地域資源管理の基盤なくしては成り立たない。今や、この「二重性」を指摘しない専門家はいないほどだ。政府も産業政策と地域政策は「車の両輪」と言ってきた。

二〇一三年、TPP交渉参加表明後に閣議決定された「日本再興戦略」では、今後一〇年間で全農地面積の八割の「担い手」集積、コメ生産コストの四割削減、法人経営体数五万人などの目標を示した。だが、こうした目標が妥当する地域がどれだけあるかや地域コミュニティと両立できるかなどに課題は多い。

もう一つ疑問が浮かぶ。構造改革後の農業の姿を、長期間「過剰」のコメだけで描くのは良いのかという点だ。戦後、コメ増産は「米食願望民族」日本人が「輸入代替」を短期間で達成した輝かしい実績だ。だが、その「輸入代替」行動が長く影を潜めているうちに比較劣位の畑作物だけでなく、一九六〇年代まで世界で最高位だったコメの単収までもが他国に抜かれてしまった。

ところが、今世紀に入って世界の食料需給構造が大きくシフトし始めた。二〇〇八年、穀物価格は以前の三〜四倍に高騰し、三六カ国が自国民優先から輸出の禁止や制限をしたため、輸入依存の途上国などで抗議行動や暴動が起きた。一四年ごろから価格がやや落ち着いたが、それでも二〜三倍に高止まっている。このシフトは一時的・循環的なものではなく、世界の人口増加、食生活の高度化、バイオ燃料などの構造的変化によるものと見られている。

輸入に頼るわが国の農産物確保も価格・品質・供給の安定が脅威にさらされることになっているが、日本の消費者は、依然として「食の洋風化」を選択する傾向が強い。コメや加工品の輸出促進も否定はしないが、その前にこうした日本の消費者の需要動向に応えていく「輸入代替」プランが必要なのではないか。

国産食料への国民の関心の高進、小麦・大豆など一部品目での「輸入代替」の現出、「稲作の独往性」から脱却する水田利用方式の革新事例の稲作中間地帯での胎動などから、そのプラン実現の可能性が出てきたと、筆者は考えている。



秋田県立大学 名誉教授
佐藤 了

さとう さとる

1949年秋田県生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学。農林省農事試験場、農林水産省農業研究センター、東北農業試験場、秋田県立大学生物資源科学部教授、学部長を経て、2014年3月定年退職。共編著に『水田農業と期待される農政転換』（2010）、『産地再編が示唆するもの』（2016）など。

母と娘とその家族が奏でる
イチゴ農園のハーモニー
此処(陽一郎園)はいいね
喜ぶお客さんの言葉が
うれしいですね

農と食
の邂逅

大畠 佳美

さん(取締役)

香織

さん(取締役)

群馬県渋川市

農業生産法人有限会社

STRAWBERRY FARM 陽一郎園

身近で「いのちの食」と「土」に親しむ観光農園
は、自然環境とレクリエーションのニーズにあっ
た農業として、高度経済成長時代に急速に発展
する。おいしいイチゴ作りを追究し、独自の
サービスで新しい農業の形を創造する。





P19: 苦しい時代を乗り越え、人気の観光イチゴ園にした佳美さん(右)と二女の香織さん P20: 佳美さんは担ってきた仕事を徐々に香織さんに引き継いでいる(右上) 休日には7時ごろから車中で開園を待つリピータもいる(右下右) 高設栽培のハウス。だれでも楽しめるようにとバリアフリーにも対応(右下左) 「楽しいと思ってもらえるように」と香織さん考案のかわいらしい看板があちこちに(左)

苦労の上に築いた基盤

のどかな農村風景の中を車で走っていると、突如飛び込んでくるカラフルな看板。四軒の観光イチゴ園がそれぞれ特徴のある看板を掲げている。陽一郎園もその一つで、ハウスの一角には休憩コーナーがあり、イチゴ狩りを終えた人が自由に座って休憩できるようにになっている。お茶やコーヒーも無料提供。「せっかく田舎に来てくれたので、ゆったりくつろいでもらいたい」と、夫の篤司さん(五四歳)と共に切り盛りする大島佳美さん(五三歳)は言う。

イチゴ栽培は篤司さんの父親の陽一郎さんが一九六〇年から始めた。「当時、観光イチゴ園は全国的にも珍しく、父は先駆者でした。最初は石垣を積んだ場所にイチゴを作るやり方で、一粒ずつ袋がけをし、木箱に入れて東京に売りに行っていたそうです」と篤司さん。七〇年からハウス栽培に切り替え、道路沿いの敷地で直売を始めた。当時はハウスでイチゴを摘み取りながら食べるのではなく、お客さんが摘んだものを量り売りするやり方だった。

陽一郎さんの背中を見て育った篤司さんは「農業を継ぐ気はゼロ」と会社勤めだが、人に雇われて働くより自分で考えてものづくりができる農業は悪くないと思い直し、職場で知り合った佳美さんと結婚後、先に実家に戻ってイチゴづくりを開始。二年後に佳美さんが加わった。

当時、観光イチゴ園は少なく、周囲から注目を浴びたが、経営は大変だった。お客さんにはハウスで自由に摘んでもらっていたが、購入分とは別にしっかりとおなかに入れてしまいう人もいた。また、当時は収量も少なく、「最初の一〇年ぐらいいは思い出したいくらいほど苦しかった」と佳美さん。すでに二人の娘が生まれていたが、家族そろっての旅行は一度もなかった。

それでも「自分が選んだ道」と佳美さんは歯を食いしばった。二女の香織さん(二三歳)は「母は自分が面倒見なきゃ、と考える責任感の強い性格」と言う。この頑張りが必要なければ、今の陽一郎園はなかったかもしれない。

篤司さんも「四軒とも互いにライバル同士でしたから、やるしかないというハングリー精神が持て刺激になった」と言う。食味の向上と増収の両方を実現するため、肥培や水の管理を徹底するなど技術の向上に努めた。また、それまでの量り売りを改めて、イチゴ狩りと販売に変えるなど、一つ一つ課題をクリアしていった。高設栽培もいち早く取り入れ、気が付くと大勢のお客さんがリピーターになって、何度も来てくれるようになった。

顧客志向でリピーター

お客さんが増えるとともに規模を拡大。離れた農地の土地を積極的に借り受け、ハウスを増やしていくという繰り返し。結婚当初、三〇アだった施設面積は、いつしか五〇アを超えるほどになった。県内では最大規模で、

イチゴ専業でこれほどの規模の生産者は全国でも少ないだろう。休日ともなると二〇〇〜四〇〇人が訪れる。取材前日の日曜日は八〇〇人が朝早くから来園したそう。

イチゴ狩りと販売の期間は二月頃から翌年五月頃までで、品種は「章姫」「やよいひめ」「紅ほっぺ」など八種類ほど。ハウスの半分



勇介さん(右)の一言で後継者になると決めた。篤司さんからは「イチゴをテーマにした夢の国のような園にしていってほしい」と期待されている

はイチゴ狩りの観光農園として開放し、残りは販売用にスタッフが管理する。販売向けのイチゴの大半は直売所で売り切れてしまう。

規模が大きくなっても変わらないのはサービスだ。摘み取りは三〇分となっているが、何時に入ってきたかを細かくチェックすることはしない。「椅子を置くとお客さ

んが長居するから良くないと言う人がいるが、反対だと思う。ゆったりと和んでもらって良い思い出を持ち帰ってもらえば、また来たいと思ってくれる」と篤司さん。佳美さんは「お客さんから、ここは他と違うねと言ってもらえる。のんびりできる空間を提供できているのかな」とうれしそう。親子、孫の三代そろってリピーターという家族もいる。

二〇一四年二月、関東地域を襲った大雪でハウスの半分が大きな被害を受けたが、急いで工事を頼み、同年九月に復旧した。その年の暮れに、香織さんは交際していた勇介さん(二八歳)と結婚し、それを機に二人で就農した。以前から陽一郎園の仕事を手伝っていたが、勇介さんの「本格的に働きたい」との一言に背中を押され、決意した。

「親族以外でも、やる気のある人間に任せたいと思っていたが、娘夫婦がやりたいと言ってくれて、こんなにうれしいことはない」と篤司さんは大喜び。

一方の佳美さんは、自分と同じ苦労をしてほしくないと複雑な想いだった。年を重ねてもできる仕事を持つてほしかった。「物事は自分の想い通りにはならんね」と、ほほ笑む。

温かみあるイチゴ園を

香織さん夫婦が加わり、陽一郎園は少しずつ変わりつつある。もともと漫画家志望で絵心がある香織さんは、ハウスごとに番号を振った看板を設置。お茶やコーヒ―、ソフト

クリームが食べられる休憩コーナーの看板も作り変え、かわいらしさを出した。また、工場勤務の経験があり、設備面に強い勇介さんは、ハウス内の設備のメンテナンスで活躍している。

複雑な想いだった佳美さんも「私の言うことは聞かない夫も、娘夫婦には聞く耳を持つ」と、家族でコミュニケーションがとれるようになったことがまんざらでもない様子だ。

期間中は毎日営業するため、翌日の摘み取り分を考え、前日の終了時間を早めなければならぬこともある。「お客さんから、『今から行っても大丈夫か』との電話をお断りすることが多く、申し訳ない」と、香織さん。

そんな様子をほほ笑ましく見つめる篤司さん。「より温かみのあるイチゴ園、より楽しんでもらえる方法を考えていってほしいが、私の目から見るとイチゴへの情熱がまだまだだ」と言う。ハングリー精神でここまでやってきた二人にとって、香織さんが未熟に見えるのは当然なのかもしれない。

観光果樹園は農業であり、完全なるサービス業だ。どちらに偏ってもお客さんは十分満足しない。そのさじ加減は簡単ではないと痛感する。香織さんは、シーズン中には直売所、オフには苗作りなど農園の仕事に汗を流す。「まずは仕事のスキルアップをすること。お客さんにうれしいと思ってもらえる園にしていきたい」と話す。若い夫婦はこれから、陽一郎園にどんな色を加えていくのか楽しみだ。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

大型雪上車のコンボイが、物資を満載したソリを数台ずつ牽引して南極の大雪原を進んでいた。南極観測隊が「昭和基地」から内陸にある「ドームふじ基地」に向かって、一〇〇〇メートルの行程を進んでいるところである。「ドームふじ基地」——。平均気温マイナス五七度、越冬時記録最低気温マイナス七九・八度、標高三八〇〇メートルというそのすさまじい自然環境は、生物はおろか細菌やウイルスさえも生存できない。そんな所に向かう隊員諸氏は、使命感に燃え立ち「日本にいる家族のためこの身が犠牲になろうとも頑張ろう」なんて考えていただろう（推定）。メンバーの一人である西村隊員（自分です）は違った。雪上車の窓越しに、青色に染まった天を仰ぎ、こうつぶやいていた。

「あー、米を何で炊こうかなあ？」

米を炊くのは水である。南極には世界の真水の九〇%があると言われている。問題はそれが全部凍っていることである。「ドームふじ基地」に着けば大型の温水槽があり、生活水は確保されている。が、しかし、雪上車での水作りは雪をバケツで溶かすしか方法がなく、各車両で作った水を持ち寄って、炊事用に使用していた。

問題はそれを各隊員がひんばんに忘れることで、そのたびに文句を言うのも悲しいので、前述の「米を何で炊こうかなあ？」につながるわけである。

和歌山でミカンジュースご飯を食べたことがあり、それがなかなかさわやかでおいしかった。再現してみた。

オレンジジュースを圧力鍋にセットし、炊いてみた。

これがなかなか好評で「サフランライスってあるけれど、あれよりも甘みがあつておいしいねえ」。西村隊員、すっかり舞い上がってしまった。サイダー、パインジュース、コーラ、缶コーヒーなど、雪上車内にあるソフトドリンクを使って日々せっせとご飯を炊いた。

その結果、隊員諸氏が水作りをサボらなくなったのである。

「今日のジュースご飯（こう呼ばれていた）なんで炊くの？ 缶コーヒーはまずくはないけれど、あと一回くらいでいいからねえ」

まずくても文句も言わず食べてくれたと思うと、ホントに隊員たちがいいとおしかった。



南極料理人
西村 淳

にしむら じゅん
1952年北海道留萌市生れ。海上保安庁在任中に89年（30次）、97年（38次）の2度、南極観測隊員に選ばれ、38次隊では、地球上最も苛酷といわれる平均気温マイナス57℃（当時）の「ドームふじ基地」で越冬した。『面白南極料理人』（新潮社）はその毎日をつづった爆笑エッセイ。2009年映画化。09年に辞職後は札幌で、「オーロラキッチン」を設立。経験を活かしたアイデア満載の料理術をまとめた書籍や講演会は大人気。URL：<http://aurorakitchen.co/>

ごはんだよー

Food Watch Japan 編集長

齋藤 訓之

(五二歳)



● さいとう 訓之 ●
中央大学文学部卒業。柴田書店編集者、日経BP社記者などを経て独立。食のプロのための情報サイト「Food Watch Japan」編集長。流通経済研究所特任研究員、亜細亜大学経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科非常勤講師。著書に『有機野菜はウソをつく』など。

茨

城県牛久市の高松求さんという農家に、営農と農業経営についてさまざまなことを教わってきた。高松さんは実際に現場の仕事を見せてくれるから説明をするとき、格言のようなキーワードを示してくださる。その中でも印象的なものの一つが、「農業は運搬業」というものだ。

営農に関して視点を変えて見直してみれば、種苗、資材、機械、収穫物などを動かすことである。格納庫、自宅前の敷地、点在するほ場、市場などの出荷先の間で、それらを移動させることが営農の実態である。播種、管理、収穫などのほ場作業でさえ、ほ場内での種苗、資材、機械、収穫物の移動にほかならない。

従って、それら物品の移動効率化は経営上、極めて重要な課題であるということを、高松さんは「農業は運搬業」という一言に込めている。

高松さんは、一九五〇年代に二〇歳代で奥さんと二人で農業をやつていくと決めたとき、すでにこのことを見抜いていた。だから、一番最初にやったことは自宅

建物の配置を見直し、接道を改善することだった。そのため、親が建てたばかりの家を取り壊して建て直すことさえしている。

それ以降も、作業動線の組み方や、物の積み方の最適な形、それに合った道具などを探求し続けてきた。この考え方と行動があつたからこそ、高松さんは離れたほ場も引き受けて、夫婦二人の経営でありながら規模拡大を果たしてきた。

さて、最近、製造業の人から「これぐらいは読んでおかないと」と教わつて、遅ればせながら、大野耐一著『トヨタ生産方式——脱規模の経営をめざして』(ダイヤモンド社、一九七八年)を読んだ。そして、この生産管理手法は、高松さんが教えてくれた一言と同じであることに気が付いた。

トヨタ生産方式の趣旨を思い切つて要約すればこうなる——大量少品種生産で勝負をする限り、米国メーカーには勝てない。日本メーカーの活路は少量多品種生産にある。その実現のためには、現場のムダを

なくして効率化する必要がある。

その効率化の考え方とツールには、有名な「ジャスト・イン・タイム」と、それを支える「かんばん方式」などいくつかあるが、理想的な仕事の仕方に気付かせてくれるのが「七つのムダ」というものだ。これはよく七つの頭文字をつないで「飾って豆腐」と覚えると良いと言われる。すなわち、「加工そのもののムダ」「在庫のムダ」「つくりすぎのムダ」「手待ちのムダ」「動作のムダ」「運搬のムダ」「不良をつくるムダ」の七つである。

このうち、高松さんの「農業は運搬業」は、もちろん「運搬のムダ」を言うのだが、高松さんは同じ場所へ物を運ぶのに二度三度、要することも戒めており、それは「動作のムダ」に当たる。地力を保つのに緑肥もいいが、できれば収益性のある作物の栽培で緑肥の効果も得ようと考えてるのは、コストだけの工程を増やす「加工そのもののムダ」を避けたいからだ。畝を真つすぐに立て、播種の列が直線になるようにこたわるのは、生育のばらつき、雑草の発生、収穫作業の支障といった「不良をつくるムダ」を発生させないためだ。

高松さんはまた「なべて働け」とも言う。忙しい日と暇な日があるようではだめで、毎日同じ程度の仕事を

続けるように仕事の計画を立てて遂行していく。もちろん、「晴耕雨読」などと悠長な発想ではいけない。天候や実際の生育状況など、その日の条件に合った仕事を用意しておく。これは七つのムダでは「手待ちのムダ」を避けることに通じるが、トヨタ生産方式全体では仕事の「平準化」と呼ぶ。

このように仕事を良くしていく活動がカイゼンだ。トヨタ生産方式で操業しているある自動車部品メーカーの社長は、こう話してくれた。「モノ作りの仕事にとって、カイゼンに終わりはしない。カイゼンすれば次の課題が見えてきて、またカイゼンをしていく」。日々の仕事そのものがカイゼンだとさえるという勢いだ。

日本の農業は、人件費が高く、気象条件が悪く、なかなか大変であると、多くの農業生産者は言う。しかし、悪条件を当然の前提とした上で、それを仕事の組み立てで克服していこうとするのがトヨタ生産方式なり、高松求流農業経営の考え方なのに違いない。悪条件を理由に現状に甘んじるのではなく、仕事のやり方を変えることで可能性を広げる。この考え方と習慣を農業に携わる二人でも多くの人が学び、身に付け、日本の農業をリードしていただきたいと願っている。

F

気象条件に影響される農業を克服する
この気象条件を前提に仕事は組み立てる

トランス脂肪酸問題の行方

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
食品研究部門食品分析研究領域 成分特性解析ユニット長

都築 和香子

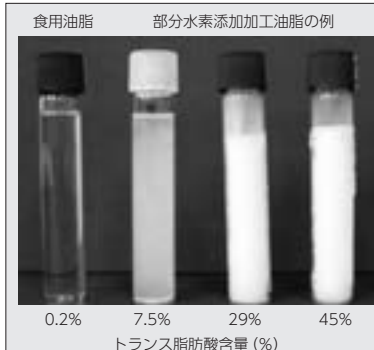
「トランス脂肪酸」という言葉を耳にすることはありませんか。トランス脂肪酸は、油脂の中の不飽和脂肪酸の一種ですが、通常の不飽和脂肪酸とは異なり、不飽和結合の部分が「トランス型」結合になっています。

トランス脂肪酸は、反すう動物の肉・乳製品や食用油脂を水素添加加工した部分水素添加加工油脂などに含まれています。その過剰摂取と冠動脈心疾患リスクとの関連性が疫学研究から示唆され、二〇〇三年、FAO（国連食糧農業機関）／WHO（世界保健機関）は「トランス脂肪酸摂取量を、総摂取エネルギー量の1%未満に」と勧告しました。この頃から世界的に、トランス脂肪酸問題が注目され始めました。

特に、部分水素添加加工油脂は、トランス脂肪酸の高摂取群へ

与える影響が大きいことから、近年では、部分水素添加加工油脂の制御で、トランス脂肪酸問題を解決しようとする動きが顕著になってきています。〇九年にFAO／WHOは、〇三年の勧告をより厳しく見直すことを示唆しましたが、一五年六月にFDA（米国食品医薬局）が「一八年以降は、部分水素添加加工油脂を安全が確認された食品成分から除外する」と表明しました。

さらに、同年一二月には欧州委員会が、「ト



ランス脂肪酸に法的規制値を設定する必要がある」という報告書を採択しました。この採択は、欧州諸国でも、部分水素添加加工油脂の使用規制が始まる可能性について言及したものです。米国に続き、欧州諸国でも、部分水素添加加工油脂に規制が敷かれると、食品の輸出に関わる日本企業だけでなく、日本のトランス脂肪酸政策も、世界的風潮を無視できなくなるかもしれません。

現在、日本人のトランス脂肪酸の平均摂取量は、摂取推奨値よりかなり低い値（〇・三%）です。ただ、諸外国が懸念するように日本でも、トランス脂肪酸含量の多い食品に偏重した食事をすれば、その摂取量も急激に多くなる傾向があります。

クリームやチョコレーの口溶け感、パンのフワフワ感、パイやクッキーのサクサク感、揚げもののパリパリ感などの食品の微妙な美味しさは、飽和脂肪酸やトランス脂肪酸の含量に左右される場合があります。

トランス脂肪酸のリスクだけを強調すると、飽和脂肪酸へ安易に代替えられますが、飽和脂肪酸にも摂取推奨値があり、日本人の飽和脂肪酸摂取量は上限に近づいています。トランス脂肪酸問題は、油脂摂取の全体の中で考えていかなければならない問題です。



Profile

つづき わかこ
福岡県生まれ。九州大学大学院薬学研究科薬品物理化学専攻修士課程修了後、農林水産省食品総合研究所に入省（現・農業・食品産業技術総合研究機構食品研究部門）。農学博士。専門は油脂化学。分析化学。



何とかすつべ、と民宿を立ち上げて 農家のお母さんが集落活性化に成功

山形県飯豊町

飯豊町商工観光課観光交流室

伊藤満世子



限界集落の危機感が契機

新潟県、福島県、山形県の三つの県境にまたがる日本一〇〇名山の一つ、霊峰飯豊山の山懷にある山形県飯豊町中津川地区に今回ぜひご紹介したい「なかつがわ農家民宿組合」があります。

「限界集落」と言われたことから、「中津川を何とかすつべ！」と農家のお母さんが立ち上がり、農家民宿を開始。今ではその民宿が中津川の顔となり、日本国内だけでなく台湾はじめいろいろな国々の人たちが農家のお母さんであるおかみや地域住民との交流などを求めて来てくれるようになったのです。

当初、「何をやってるんだか」「やっても無駄だ」と思っていた地域住民もいたようです。しかし、訪れた多くの人々が喜ぶのを見て、ここでの暮らしに自信を持つようになりました。

飯豊町は人口七五〇〇人ほどの、自然豊かな町です。明治初期に東北、北海道を旅したイギリス

の女性旅行家、イザベラ・バードが『東洋の桃源郷（アルカディア）』と絶賛した美しい田園風景が広がります。また中津川地区の白川ダム湖周辺の景観や、飯豊山が織り成す四季折々の景色は美しく「日本のスイス」と外国人観光客が絶賛してくれるほどのです。

町の総面積三二九平方キロメートルのうち、八割を森林が占めていますが、基幹産業は農業です。最上川の源流となる白川の水の恵みを受ける、おいしい米の産地です。また、黒毛和牛として名高い「米沢牛」の主産地で、その堆肥を利用したアスパラガスの栽培も盛んです。

中津川地区は一九六七年の羽越水害をきっかけに造られた白川ダムの上流に位置することから過疎・高齢化が進みました。六五年には二七三〇人であった人口は、二〇一〇年には三二八人へ減少、同年の六五歳以上の高齢化率は五四%です。子どもの数も減少し、小中学校の維持も難しくなりました。

地域を何とか元気にしたいという住民の思いから取り組み始めたのが、〇四年度からの「山村留学」です。これは一〜二年間の長期にわたり一〜三人の子どもが「留学」し農家で暮らすもので、児童数を僅かでも増やすことで学校の存続につなげる狙いがありました。

前年には、試験的に三〇人の子どもが分散して農家に宿泊する「短期留学」の取り組みをしましたが、地域住民も積極的でした。さらに受け入れ農家は受け入れ組織として「里親の会」を結成しました。

八人の農家おかみが結束

山村留学が定着するようになると、今度は町から教育旅行受け入れの提案が来ました。交通不便な奥地であり昔から行商人などを民家に泊める風習があったことから他人を泊めることに抵抗は少なかったようです。里親の会のメンバー達は、地域活性化のためのチャンスとばかり、本格的に民

profile

伊藤 満世子 いとう みよこ

1970年、山形県飯豊町中津川地区に生まれる。91年度より、飯豊町役場健康福祉課栄養士として勤務し、2010年度より、食育・地産地消担当として農林振興課勤務を経て現職。その間、なかつがわ農家民宿組合の事務局として組織育成に5年間携わってきた。

なかつがわ農家民宿組合

2006年、飯豊町中津川地区の山村留学「里親の会」のメンバーで農家民宿の営業許可を取得。07年、教育旅行を受け入れるための中心組織として組合を立ち上げる。現在は、教育旅行のほか、台湾人をメインとした外国人の田舎暮らし体験ツアーなど、年間1000人以上の観光客を受け入れており、農業体験や郷土料理体験を通し、食と農業の大切さについて都市部や諸外国へ発信している。

宿を立ち上げようと営業許可取得に乗り出した。
一回当たり数十名の子どもの受け入れられるためには、地域ぐるみで対応する必要があります。そこで、なかつがわ農家民宿組合の初代組合長を務めた伊藤信子さんを中心に八軒の農家で、〇六年に民宿の営業許可を取得し、〇七年に組合組織が出来たのです。
「地域の発展には女性の力が欠かせない」と県の普及組織の担当者が書類の書き方から施設の整備についても親身になって指導してくれるなど関係者の強力な後押しがありました。
民宿では中津川の魅力を発信するために、地区の新鮮な食材を利用した料理を提供しています。最初は組合で料理や体験なども統一しようかと



上：いろいろを囲んで、地域の特産食材のご馳走を楽しむ外国人旅行者
下：都会では得られない非日常体験に夢中の旅行者

話になりましたが、訪問者があるのままでの日常を喜んでくれることに気づき、「おらえ」(私の家)の得意料理やそれぞれの暮らしを体験してもらうことにしたのです。
民宿では、農家のお母さんをおかみと、お父さんを番頭と呼んでいます。おかみと番頭は素朴で行き届く範囲だけど、家族同様にもてなしたいという気持ちでいっぱいでした。
中学生の教育旅行については、〇七年度は一校四〇人、三年後には六校三五〇人と増加していきましたが、その受け入れシーズンが五月に集中するという課題がありました。登山客など個人の宿泊もありましたが、多くはありません。
年間を通して団体を受け入れられないかと考えていた時、町長と以前からつながりのあった旅

台湾観光客受け入れに戸惑い

ところで、東日本大震災は当地区にも影響を与えました。福島県と隣接していることから、放射能の心配があるという声が首都圏の保護者からあり、残念ながら教育旅行で訪れる学校が二、三校に減ってしまったのです。
行会社の株式会社ジェイティービーの方に相談を持ちかけたことでプロジェクトが立ち上がり、株式会社JTBコーポレートセールス企画による農都交流プロジェクト事業が二年度から始まり、企業の社員研修や大学生などで団体が増えたのです。現在、この事業は終了しましたが、今でも研修など年間を通して団体を受け入れる下地になっています。

しかし、時を同じくして飯豊町の観光協会から台湾の訪日旅行者（インバウンド）受け入れの話が持ち上がりました。台湾では、芸能人が縁もゆかりもない田舎の町や村を訪ね、見ず知らずの人の家に一泊させてもらうという日本のテレビ番組が流行り、日本の田舎への憧れが高まっているという情報に注目したのです。

しかし、おかみたちは当初、多くの外国人の受け入れに不安を感じたといいます。言葉も通じないし、何を食べさせたらいいのか、どのように接したらいいのか戸惑ったのです。ところが、いざ台湾の方々を受け入れてみると、日本語を話すことができる人もいるし、漢字の筆談や仕草でも十分通じることが分かり、抵抗感は消えていきました。普段、外食が中心の台湾の方々は、家族と同じように大皿から料理を取り分けて食事をいただくことに喜んでくれるといいます。

都会で得られない非日常体験

さて、訪れてくれた方々はどのような思いをいだくのでしょうか。まずは、中学生たちです。普段朝食も十分にとらずに、夜遅くまでの塾通いなどでコンビニで食べたり、個食が当たり前の子ども達は家族のように食べるご飯に感激した、と言います。「もういらねなが？ いっぱい食べろ」と優しくすすめてくれたおかみ達との別れには、たった一泊にもかかわらず涙が止まらない子どももたくさんいました。

また、大学生や企業の社員は、米の収穫作業を手伝ったことにより、農業の大切さ、お米ができる過程をあらためて知った人が多く、体験する全

てが驚きの連続だったようです。中には「お米って穀に入っているんだ」と感動し、その場で生米をかじっている学生もいました。

そして何より、お金がないと何もできないと思っていたのに、おかみや番頭は、食材は山や畑からとってくるし、大工仕事も機械の修理も全部自分たちでやってしまうことにショックを受け、尊敬のまなざしに変わっていくのです。

地域の住民たちが当たり前に行ってきた農業や地元素材を活用した手作りの料理が、首都圏の方々にとっては非日常なのでした。田舎の良さを感じて欲しいと思って始めた民宿ですが、続けていくうちに「もっと自分たちの暮らしに自信と誇りを持つべきなのではないか」と地域住民の意識が変わりました。

限界集落とされているけれど、自分たちが住んでいる地域が、とんでもなく素晴らしいところだったということに気付きはじめたのです。

多くの人たちのおかげで、中学生四〇人の教育旅行の受け入れから始まった農家民宿の取り組みは、今では年間一〇〇〇人を超えるようになりました。おもてなしの手が行き届かなくなることをおかみたちが危惧するほど受け入れ数が増えてきています。おかみと番頭のあたたかさが訪れる人びとをとりこにするのかもしれない。

農家民宿を始めたころは、季節の良い五、六月にかけての客数が多かったのですが、今では豪雪地帯でもある中津川の冬を楽しむに来てくれるお客さまもいます。雪に閉ざされ不便な冬ですが、雪明りに包まれた幻想的な風景や、雪かき、雪遊びなど、山村の日常を味わいに来てくれるのです。

団体ばかりではありません。評判をきいた小さなお子さん連れの家族や、中高年層の夫婦、友達同士のお客さまなど、リピーターが増えています。中津川地区に農家民宿ができたことで、お風呂は地区内にある温泉を使ってもらったり、お酒は地域内の酒屋さんで購入したりと地域経済に貢献しています。食材で、山菜、自家野菜、シイタケやヤマメ、などといった地元のものを使うことで、地域の中で経済の循環を目指しています。

しかし、悩みもあります。それは現在の農家民宿メンバーが八〇歳代から若い方でも五〇歳代であるため、後継者の育成が大きな問題となっているのです。

でも、暗い話ばかりではありません。森林事業のNPO法人職員の女性は、何回か訪れるうちに中津川地区を気に入ってくれたようで、インターン者として中津川に越してきてくれました。こちらで結婚され、お子さんも生まれ、中津川の宝となっておりま。この方が農家民宿の営業許可取得を検討しています。うれしい話です。

また、若い人たちが戻ってきたり、就職しても町外へ出ずに定住する方も増えてきました。

農家民宿のおかみたちは、台湾以外の外国人の受け入れに向けて研修を受け、地域の素材を十分に活かし、若い人から高齢者まで喜んでもらえるおもてなしについて、日々研鑽を積んでいます。八軒の農家民宿はそれぞれが特徴的で、楽しい方々ばかりです。さらに今、「限界集落に負けてらんばえ！」と地域全体の士気が高まっています。

ぜひ一度、なかつがわ農家民宿と中津川地区へ遊びにいらして下さい。

『武蔵野・江戸を潤した多摩川』
安富 六郎 著

(農山漁村文化協会・1,700円 税抜)

歩かないと見えない世界がある

宇根 豊

(百姓・思想家)

首都圏に住む人なら、この本を読むとそこに行つてみたくなるにちがいない。かつて江戸は世界有数の大都市だった。生活の豊かさと並んで、緑の多さと清潔さで、世界で最も美しい首都だと言われていた。その秘密がわかったような気がする。七〇歳になった安富さんは、多摩川を河口から源流まで歩き継ぐと決心する。川と水の風土を体でつかもつ、という気持ち溢れる紀行文だ。

多摩川は急流で橋が少なく、「渡し」が多かった。その一つ一つを目の前にして佇む姿が目につかぶ。筏流しによって堰が破損し、当て逃げが横行した話や、洪水で流れてくる丸太が収入になった話には、笑ってしまった。やがて源流の笠取山(一九五三^{カサトリヤマ})にたどり着く。一三ヶ月、一三八^キメートルを超える道のりだった。源流は水晶からしたたり落ちていくという伝説は、安富さんの心証では正

しかったようだ。

ゆっくりしたテンポで進む前半に比べると、後半は多摩川から取水して武蔵野を灌漑した四本の「用水」の探索紀行に移り、筆が速くなる。ここでは農業工学の大家であった安富さんの観察眼と推理眼の深さに目を見張る。安富さんは用水沿いに歩きながら、さまざまな疑問にとらわれてしまふのだ。

「玉川上水」では、測量なしにできたということが信じられなくて、既存の街道を利用した測量法を推理する。それにしても千分の二の勾配で水路を掘削する技術には感嘆する。この上水は、太宰治が入水自殺するぐらい水量が豊かで、「人喰い川」と呼ばれていたと言う。

「野火止用水」では、すぐに通水できたという説と二年間水が流れなかったという説を検証するところが白眉だ。安富さんは「風景の変化」から、地下水位の上昇を想像して、定説を覆す結論に達している。

これらの用水は上水にも農業用水にもなり、武蔵野台地の農業生産を数倍に増やしただけでなく、風景と自然を豊かに変えたのである。明治時代にも「三田上水」(八^{ミタカ}キメートル)に水車が四九箇所もあったなんて、信じられなかった。最後に安富さんは、用水の復活を提言している。

歩いてみないと見えない世界がたしかにある。写真の美しさも特筆ものだ。ぜひ関東地方の人は、この本を片手に、安富さん推薦のスポットに、カメラ持参で出かけてみてほしい。

F

読まれてます 三省堂書店農林水産省売店(2016年3月1日~3月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農林水産六法 平成28年版	農林水産法令研究会/編	学陽書房	13,000円
2 週刊ダイヤモンド 2016年2月6日号 攻めに転じる大チャンス 儲かる農業		ダイヤモンド社	657円
3 日経ビジネス 2016年3月28日号 発表! TPP時代に勝てる農産物ジャパン		日経BP社	639円
4 農業と経済 2016年4月臨時増刊号 農業経営の継承	「農業と経済」編集委員会/編	昭和堂	1,700円
5 GDP4%の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
6 シカ問題を考える バランスを崩した自然の行方	高槻 成紀/著	山と溪谷社	800円
7 林業イノベーションー林業と社会の豊かな関係を目指して	長谷川 尚史/著	全国林業改良普及協会	1,100円
8 森と山と川でたどるドイツ史	池上 俊一/著	岩波ジュニア新書	880円
9 ウシのきもち、ヒトのきもち 乳牛獣医師の四方山ばなし	山下 厚/著	全国酪農協会	926円
10 農業ビジネスマガジン 2016 WINTER Vol.12 農業の「困った」に応える最新テクノロジー		イカロス出版	1,500円

プロ農業者たちの国産農産物・加工食品展示商談会 第11回「アグリフードEXPO東京2016」を開催します

八月一八日(木)、一九日(金)に東京ビッグサイトにおいて日本政策金融公庫では第11回「アグリフードEXPO東京2016」を開催します。

出展者の皆さまには、国産農産物および加工品を個別出展ブースに展示していただき、来場される各業種のバイヤーの皆さまとの商談に臨んでいただきます。

開催規模は、五五〇小間を予定しています。

出展者の募集期間は、五月三一日(火)までです。

なお、申し込み小間数が収容上限に達し次第、受け付けを終了させていただきます。ぜひ、お早めにお申し込みください。

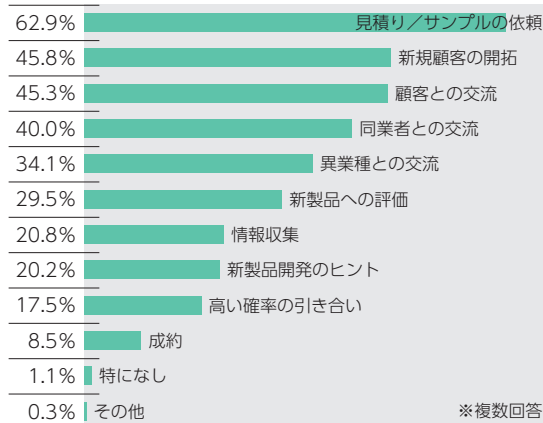
詳細は、公式ホームページ(<https://www.agri-foodexpo.com/>)をご覧ください。

また昨年の「アグリフードEXPO東京2015」にご参加いただいた出展者・来場者のアンケート結果は下図の通りです。

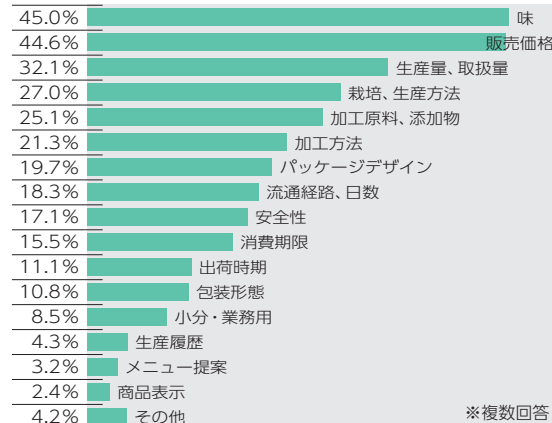
(情報企画部)

前回 (2015年) の出展者アンケート結果

■出展者数…合計/868社 734小間 ※共同出展者含む
■会期中商談件数…1社平均/12件 最高/300件
出展の成果は？

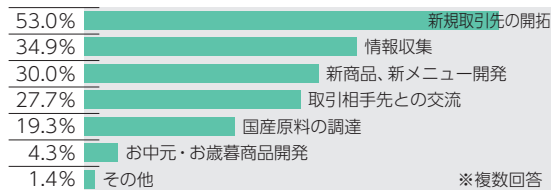


■会期中成約件数…1社平均/4件 最高/73件
■会期中成約金額…1社平均/168万円 最高/3,000万円
来場者の関心は？

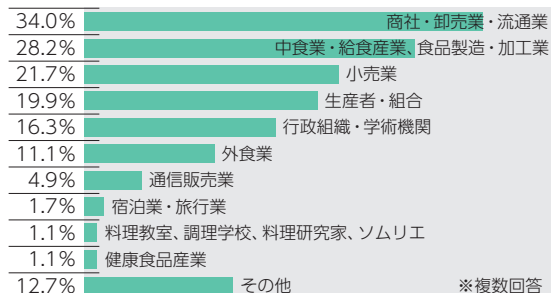


前回 (2015年) の来場者アンケート結果

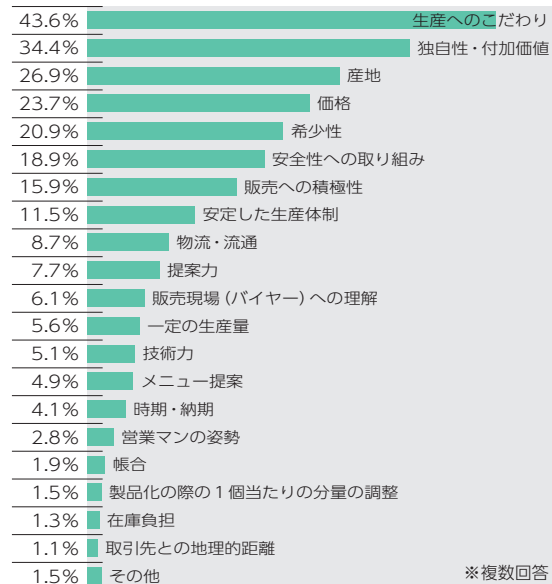
■登録来場者数…14,624人
来場の目的は？



あなたの職業は？



取引で重要視する点は？



福井市内で

融資先交流会を開催

一月二〇日、農業者や食品企業のお客さまの相互交流を図ることを目的に交流会を開催し、四三人にご参加いただきました。

まず、TPPへの対策や新規就農、六次産業化について、参加者が日頃感じていることを発表していただきました。米の消費量低迷や事業継承の問題など興味深い意見も出され、活発な意見交換の場となりました。懇親会では参加者相互の交流も図られ、「経営者の想いや考え方が分かりました」「今後の事業展開や計画に取り組むタイミングとして有意義でした」などの感想が寄せられました。（福井支店）



農業者の取り組みについて聞き入る参加者

京都の食に関する

インバウンドセミナーを開催

一月二一日、「インバウンドセミナー」を開催し、観光・食品関係のお客さまや関係機関を含めた一二二人にご参加いただきました。

一般社団法人国際交流サービス協会の三木茂樹氏を講師に迎え、「インバウンドセミナー 京都の食の強みをアピール」と題して、食の好みを国別にご紹介いただくなど、インバウンドに対応するため準備すべきことについてご講演いただきました。京都府を訪れる外国人観光客数は年々増加しており、参加者からは、「今後の商品展開の参考になりました」との感想をいただきました。（京都支店）



参加者は講演に熱心に耳を傾けていました

● 交叉点 ●

アジアの農業金融関係者が 静岡県の先進農業を視察

日本公庫は二月一五（二〇日）、アジア太平洋農村・農業金融協会（APRACA）※に加盟するインド、スリランカ、フィリピンの農業金融関係者一〇人を研修生として受け入れました。

研修生は、まず日本の農業や農業金融の概要と日本公庫農林水産事業の業務、わが国の農業協同組合制度などについて講義を受講しました。

その後、静岡県に足を運び、農事組合法人ジャパン・ベリー、株式会社サンファーマーズ、株式会社鈴生などを訪問して、六次産業化や商品のブランディング、ICTを活用した栽培管理などについて学びました。さらに大阪に移動し、「アグリフードEXPO大阪2016」を見学。農業者や食品企業の出展者がこだわりの農産物を来場者に向けて積極的にPRする姿を興味深い様子で見入っていました。

研修後、研修生からは「農産物の生産・加工・販売まで一貫して行う

ことによる地域農業者の所得の向上や、ブランド化による付加価値の向上に資する取り組みは、自国の農村・農業の振興や発展にとって大変参考になりました」などの感想が寄せられました。

本研修にご協力をいただいた皆さまに改めてお礼申し上げます。
※アジア太平洋地域の農村・農業金融制度の改善を図るため、情報交換や研究・教育など交流活動を行う機関です。

（静岡支店・情報企画部）



ジャパン・ベリー（藤枝市）での視察の様子

みんなの広場

平成28年(2016年)熊本地震により被害を受けられた皆さまに対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫では、農林漁業者などの皆さまに対して、本店、熊本支店、大分支店および九州の各県支店農林水産事業に相談窓口を設置し、ご相談を受け付けています。

ご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細やかな対応を行ってまいります。

■お問い合わせ先

本店 TEL:0120-926478

熊本支店 TEL:096-353-3104

大分支店 TEL:097-532-8491

九州の各県支店農林水産事業

り方についても特集していただければと思います。

(京都府 前田 洋二)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒〇〇〇〇〇〇四

東京都千代田区大手町一〇九四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三三三〇一三五〇

編集後記

④ 熊本地震で被害に遭われた皆さまにお見舞い申し上げます。

さて、今号は法人化に着目しました。優れた人材を吸収し競争力を高める法人が農業の核となっていく一方で、変化にシなやかに対応し強い経営を実現している個人家族経営も目立ちます。今後、多様な経営体の共存が産業の活力を高めるのではないのでしょうか。(嶋貫)

④ 「農と食の邂逅」の陽一郎園は、おもてなしたっぷりのイチゴ園です。そういえば、以前私が訪れたイチゴ園には椅子も休憩コーナーもありませんでした。大好きなイチゴをおなかいっぱい堪能した後の幸せは格別でしたが、食べ疲れたのも確か。今がちょうどイチゴの旬です。皆さまも真っ赤なイチゴを摘み出かけてみてはいかがでしょう。(小形)

④ 被災された皆さまにお見舞い申し上げます。南極という過酷な状況で、かつ、大変な任務を担いながらも遊び心を忘れない西村さんや隊員の皆さんは、器が大きいという表現がぴったり。見習いたいです。

さて、コンボイが大雪原を進む写真と、水作りの様子の写真を提供していただいたのですが、誌面の都合上掲載できませんでした。(城間)

④ 今号から編集に加わりました。各界でご活躍されている執筆者からご寄稿いただいた文章を、正確に、読者の皆さまにお伝えできるよう努力してまいります。「多論百出」の齋藤訓之さんの言葉の通り、仕事のやり方をカイゼンし、無駄をなくして仕事の可能性を広げてゆきたいと思えます。どうぞ、よろしくお願い致します。(亀上)

AFCフォーラム Forum

■編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
飯田 晋平 小形 正枝 城間 綾子
林田 せりか 亀上 早織

■編集協力

青木 宏高 牧野 義司

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ http://www.jfc.go.jp/

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/toiawase/

■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとと田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食をつなぎます。

第11回 アグリフードEXPO 東京 2016

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月18^木日/19^金日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



● 次代に継ぐ

企業の農業で拓く可能性



『両開の田うえ』梅崎 遥陽 福岡県柳川市立両開小学校

■ AFCフォーラム 平成28年5月1日発行(毎月1回1日発行)第64巻2号(789号)
■ 発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■ 販売/株式会社日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南校ビル Tel.03(3432)2927 ■ 定価514円 本体価格476円



日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<http://www.jfc.go.jp/>